



生活やものづくりの学びNetニュース

巻頭言

ウィズコロナ時代の生活やものづくりの学びの可能性

世話人代表/日本家庭科教育学会長
堀内 かおる(横浜国立大学)

新型コロナウイルス感染症の流行が一向に収束の見通しの立たないまま、2年の日々が過ぎようとしています。新たな変異株が次々発見されて、この未曾有のウイルスと向き合わざるを得ない毎日が続く中で、私たちが生活に向けるまなざしにも変化があったように思います。

密閉・密集・密接の「三密」を避け、人と人とのディスタンスを保ち、直接的な人との接触をできるだけ避けるという感染予防をして営む「新しい生活様式」は、新たな社会規範となつて、私たちの生活の「あるべき姿」を示しています。また、オンラインによる間接的でバーチャルな合理化されたコミュニケーションで、人と人がつながるようになっていきます。これらの変化を受け止めながら、私たちはどのようにして、主体的な生活者としてよりよい生活を創っていきけるのか、改めて問い直したいものです。

生活やものづくりの学びの本質は、まさに、今の困難な時代を生きる私たち一人一人が自らの望む暮らしを営むための知識とスキルを身につけていくことだと考えています。子どもたちにとって、実習が困難になるなどの課題はありますが、ステイ・ホームが叫ばれたコロナ禍の今だからこそ、多くの人々

が生活の拠点としての家庭に目を向けて以前よりも長い時間を過ごすようになり、家庭生活の再発見が行われてきたのではないのでしょうか。今こそ、生活やものづくりの学びのための教科である家庭科、技術・家庭科がその教育的真価を発揮する時だといつても過言ではないでしょう。子どもたちが自分の生活を見つめ直した時にどのような課題が見えてくるのか、そしてその課題を解決するにはどのような方法で、何を行っていけばよいのか、対話的な授業を通して、友達と交流しながら考える学びを期待したいものです。「我が家の当たり前」だと思つてきたことが唯一の正解ではないのだという気づきは、子どもたちに「生活を相対化する視点」を与えます。多様性を認め合いながら、それぞれが「よりよく」あるための工夫として、取り入れたい普遍的かつ基本的な〈知〉や〈技〉があるという気づきも重要です。困難な時代だからこそ、生活と向き合う学びを蓄積してきたこのネットワークに集う私たちにできること・やるべきことがあるはずで、す。今後も、本ネットワークが会員の皆様の実践・経験をつなぐ出会いの場となるような機会を設けていきたいと考えています。

Contents

巻頭言1
報告 「生活やものづくりの学びネットワーク 公開フォーラム」2~3
コロナ禍での産業教育研究連盟の活動4
書籍紹介 『技術・家庭科ものづくり大全—その教育理念と授業実践』5
新教育課程における中学校「技術・家庭」の主な改訂点と今後求められること6
会員継続のお願い・事務局からのお知らせ7
「春の学習交流会」のご案内8

生活やものづくりの学びネットワーク 公開フォーラム
「新しい生活様式」を意識した授業づくり—コロナ禍の中の子どもと学校—

I はじめに

2021年9月26日(日)10:00から12:00に、「生活やものづくりの学びネットワーク公開シンポジウム」がZOOMにより遠隔開催された。『技術科と家庭科の「ものづくりの学び」—子どもたちの学びの保障から考える—』をテーマとし、登壇者として以下の3氏をお迎えした。

情報提供者：内糸俊男氏(北海道檜山郡厚沢部町立厚沢部中学校教諭)、浅井直美氏(元東京都公立中学校教諭)

コーディネータ：石井克枝氏(元千葉大学、全国家庭科教育協会副会長)

2021年3月に開催した春の学習交流会同様に、今回も会員からの要望をもとに、コロナ禍における技術科と家庭科の子どもたちの学びの現状を踏まえ、どのような取り組みができるのか、少人数学習や調理実習を手掛かりに考えることにした。

内糸氏、浅井氏より話題提供をいただいた後、石井氏のコーディネートによりディスカッションが行われた。参加者は85名だったが、申し込み締め切り日を過ぎても例年になく問い合わせや参加希望が多く、関心の高いテーマであることがうかがわれた。

II 話題提供者要旨

(1) 内糸俊男氏より

過疎化が進行している地域の小規模校(全校生徒71人)で技術・家庭科を担当しています。各学年の人数が20人ほどなのでコロナ禍でも、大きな制限を受けることなく授業を進めています。生徒の実態ですが、情報化の急激な進展により、都会で生活する生徒と田舎で生活する生徒の間で入手できる情報に差はなく、興味関心の方向も全く同じです。異なるのは毎日見ている風景ですが、そこに興味はなく、1次産業に関する知識もありません。スマホの所持率上昇などに伴って、ものづくりの経験も年々少なくなっています。こうした状況ですが、ものづくりの経験やスキルは子どもたちの発達成長に欠くことのできない大切なものであるとの考えから、技術科の実習では次の2点を意識して進めています。一つ目は「生徒の発達段階や技能の習得状況に合わせた材料選択を常に意識するということ」です。具体例として最初から木材を材料としたものづくりを行わせるのではなく、牛乳パック(紙)を使ったものづくりを行い、成功体験を持った上で木材を使ったものづくりを行っています。二つ目は「ものづくりから成就感が得られるような工夫をす

ること」です。ここでは「繰り返し」を強く意識しています。同じ作業を繰り返すことになるような題材を取り入れています。具体例として「レインボースティック」という玩具を作っています。角材を5ミリの厚さでカットして、穴を開けたもの32枚に色をつけます。この部品が螺旋状に加工した針金に通してあって針金にそっておいてくる木片の動きと色の変化を楽しむという玩具です。何度も横挽きを繰り返し行うことで技能の高まりを感じられていることを生徒の様子を見て感じています。繰り返しは木材加工だけに限りません。他の分野のものづくりでも繰り返しを意識的に取り入れることで、生徒は工具の扱いにも慣れ、技能の高まりを感じ取っています。

(2) 浅井直美氏より

昨年度の在籍校では、臨時休業が昨年2月末から5月末まで続き6月の3週間は分散登校、6月22日から感染症対策を講じての一斉授業であった。1学期は、調理実習をしないようにという指示で、臨時休業中に肉・魚・野菜料理実習を課題として出した。しかし、家庭による差があることや食生活学習全般の理解のためには調理実習授業が必要と感じ、2学期からはクラスを半分にしての実習を行った。クラスを出席番号で奇数と偶数に分け、半数を家庭科の調理実習、半数は技術科ということで学校長の許可を得た。当然授業数は2倍になるため技術科の先生の協力が不可欠である。また、時間割作成でも協力をいただいた。

コロナ禍での調理実習は、1時間授業とし、なしの皮むき、いわしの手開き、結びかまぼこのすまし汁を行った。これは、私がコロナ禍前に行きついた調理実習授業を基本として、その中から可能なものを選んだ。コロナ禍の前に、子どもの調理に関する生活の変化を考慮するとき、調理実習授業のめあては、「一品・一食分の調理ができるようになる」から、「食品や調理に出会うため」と考えるようになっていた。そのためには、一人一人が食品や調理に向き合い、少し難しい内容も入れて、同じ調理をする友達と出会えるような調理実習授業に行きついていた。

コロナ禍となり、その内容を少人数で行うことで、さらに子どもたちは落ち着いて食品や調理に向き合うことができ、授業者も、子どもたちの様子をしっかりと観察でき適切な言葉かけが可能となった。また、友達の調理する姿を見ることで、自分にもできそう、やってみよう

という気持ちになることも分かった。オンラインでの配信や家庭での実践では得られない学びが学校の調理実習授業ではあると考える。感染対策の徹底と一人ずつのまな板・包丁などの準備を行い、少人数指導できる工夫をするとともに、50分でできる調理実習題材を検討していく必要があると考える。

III シンポジウム

参加者から次々に寄せられる質問に答える形で、活発な議論が展開された。技術科の内糸氏に対しては、木片のおもちゃやひもで作る作品についての質問から始まり、指導上の工夫などが話し合われた。

浅井氏からは、調理の得意でない生徒が授業中の友人との関りから成長する様子などが紹介され、学校で実習をする意義が報告された。これまで調理実習はグループで行うことが前提とされてきたが、一人作業を含めて少人数による実施の効果について質問・意見が出された。

今回のシンポジウムでは、ものづくりの学びの意義を改めて参加者全員で確認し、そのために①子どもたちの実態を正しくつかむこと、②繰り返し指導すること、③少人数指導が必要であることが再認識された。

IV 参加者の感想より

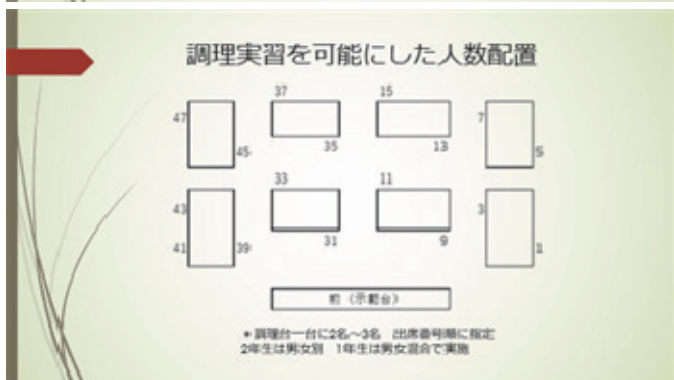
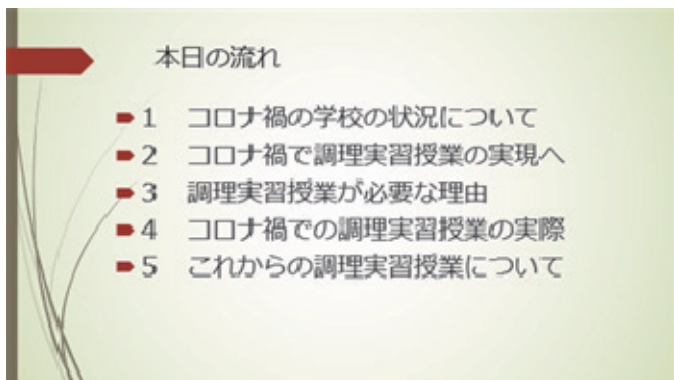
・全国的に生活経験が少なくなっている子どもたちにとって、「実習」を行うこと自体に対して、非常に価値がでてきていることを改めて感じました。

・体験を重視する家庭科教育らしく、シンポジウムの情報提供も質疑もまとめも「実践」に貫かれていて大変参考になりました。

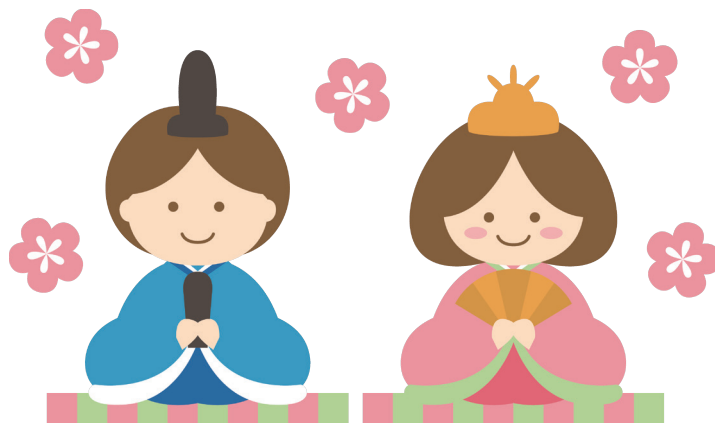
・実習を学校で行う意義を伝え、工夫して実習を行うことができることを示して何とか実習を行う方向につなげていきたいです。



生徒の作品（技術科：内糸氏）



当日発表資料より（家庭科：浅井氏）



コロナ禍での産業教育研究連盟の活動

産教連委員長・鈴木賢治

1. コロナ禍での活動自粛？！

コロナ禍にあっても社会活動は、その必要性から日常的に営まれています。しかし、民間教育団体の活動は、感染防止に止まらず、自粛ムードにより従来の活動に困難を極めています。産教連の場合は、全国大会を開催しても 50 人規模であり、感染の防止の観点から問題視されることはないのですが、自粛ムードを払拭することができません。この 2 年間、大会を中止しています。毎月開催していた東京サークルの研究会も、コロナ禍で開催されていません。産教連の総会だけは、何とか 2021 年 8 月に開催しました。

コロナウイルスの正しい知識で健康管理および検査に基づいて科学的に対応すれば、研究大会の開催は何の支障もありませんが、世の風潮はそう簡単ではないところに課題があります。

2. 既往の実践と研究を総括したこの 3 年

コロナ禍で大会開催ができなかったことは、大きな損失です。これまで、実践を持ち寄り、それを討議して研鑽を積んできた成果に依拠して、産教連の活動が成り立っていました。その継続性が絶たれたことは、民間教育研究の生命に関わります。将来、振り返るとそのことがわかるはずですが、失ったものを取り返すことは、並大抵の努力では無理です。

この間、産教連では創立 70 周年の節目になると考え、これまでの活動を総括し、まとめることに精力的に取り組みました。活動の集大成として『技術・家庭科教育ものづくり大全 - その教育理念と授業実践』(656 ページ)を合同出版から上梓しました。技術・家庭科の先生方々に限らず、広く読んでいただきたいと思います。

3. 今後の活動をともに模索しませんか

コロナで失った陣地をどう取り戻すか、改めてその困難さを感じますが、それを解決する道を模索したいと思っています。この課題は、産教連に限らず、民間教育研究団体の共通のものであります。

ものづくりネットワークのシンポジウムや学習会では、Zoom 開催の方が参加者数が多いようです。手軽さや移動がないので、他の学会でも非対面の方が、参加者が多いという数字も見られます。しかし、民間教育研究団体は、一人ひとりの会員が大会などに参加して、人間的な成長をし、それに依拠して活動が支えられてきた面も否定できません。情報交換であれば、非対面の活動でも何とかありますが、人間的成長や活動を支えてくれる人材の育成を考えると、非対面には限界を感じます。

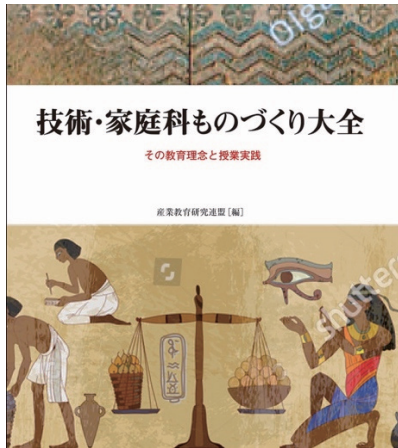
当面は、小規模ながらも研究会や学習会の開催などを模索して行く予定です。



書籍紹介

『技術・家庭科ものづくり大全—その教育理念と授業実践』

産業教育研究連盟編『技術・家庭科ものづくり大全—その教育理念と授業実践』合同出版, 655 頁, 本体 3000 円
2021 年 8 月発刊



学力低下や理科離れなどが指摘されて久しいにもかかわらず、依然として解決されていません。戦後の技術・家庭科教育の歴史をたどると、子どもたちが学ぶことから遠ざかる原因が見えてきます。例えば、いまの日本は、ものづくりを大切にしてきた経済から、為替や株取引など実態を伴わない金融経済へと移行しています。家庭や生活を見ても消費がほとんどで、生産の姿は見当たらなくなっています。

子どもたちには、生活の中で生活を通して学ぶことが必要です。ものに触れ、ものを作ることを通してその裏側にある原理や法則を理解します。子どもたちの全面発達を支える教科の一つとして、技術・家庭科の役割は、ますます重要になっています。

しかし、授業時間数の削減に伴い、教員配置は手薄で免許外担任が多く、実習に見合った授業時間の確保も困難です。

これらの諸課題を解決するには、技術・家庭科の教育理念と授業実践を歴史の中で再度位置づけることが重要な意味を持っています。本書は、産業教育研究連盟の70周年を記念して、これまでの教育実践と活動を集大成したものであり、その役割を担うにふさわしい大全です。技術・家庭科の教員の方の座右の書の一つとして、本書をぜひ置いていただきたいと思います。

本書は、「技術教育・家庭科教育の課題」と「教材と授業実践」の二部構成になっています。第一部では、戦後の技術・家庭科の変容と課題をまとめ、その教育的役割を示しています。また、総合技術教育の学びから、人間形成における技術・家庭科教育の役割を示しています。また、民間研究団体として発足した産業教育研究連盟(産教連)の歴史と活動を通して、教育研究団体として果たし

てきた役割をまとめています。

第二部の第4章で、技術・家庭科の教科内容と方法について論じています。この章は、技術・家庭科のみならず、他の教科の教員にも参考になります。

第5章以降は、木材加工、金属加工、機械、電気、情報、栽培、食物、そして最後に被服の領域となっています。各章に、それぞれの領域の教材と授業実践がまとめられています。産教連は、戦後の職業科にはじまり、技術・家庭科の現場教員が研究活動をしなが、月刊誌「技術教育」「技術教室」を発刊してきました。その活動を通して、これまで提案し教育実践を通して試されてきた教材とその授業の内容をまとめています。

木材加工では、製図の役割、木の性質を生かした教材、教材開発の過程が示されており、これまでの人気教材が厳選されています。

金属加工では、人間が作った材料としての金属の意義、その性質を生かした教材と実践がまとめられています。また、道具を使う教科としても位置づけています。

機械では、自転車、機構、エンジン製作の教材の発展と実践をまとめながら、領域として力学の視点の重要性を指摘しています。

電気では、電気の性質や発送電に始まり、はんだ付け、テーブルタップなどの基本から IC を利用した電気回路までをまとめました。

情報では、発足当時から議論になった情報学習の意義やあり方の教育論をまとめ、授業実践、情報モラルとプログラミングまでをまとめました。

栽培では、農と食を結ぶ観点を大切にした実践をまとめています。特に、栽培実習の整備環境は、都市部と地方で大きく異なります。それを克服する授業の方法についてもまとめました。

食物では、これまで教材として長年の蓄積を踏まえて、米、小麦、豆腐、味噌、魚、牛乳、卵の学習と魅力的な授業実践をまとめました。

被服では、技術的観点を大切にした産教連の実践をまとめています。0次元から3次元までを作るように、綿の栽培から繊維、紡織、縫製の段階を大切にした教材をまとめました。また、限られた授業時間、かつ男女共学で学べる教材も取り上げました。

将来を担う技術・家庭科の若い教師に、技術・家庭科のまとまった書籍を残すことは、とても大切ですが、なかなか出版の機会がありませんでした。合同出版のご理解により、出版の機会が得られたことは、幸いです。

産教連委員長・鈴木賢治(新潟大学)

新教育課程(技術分野)について

新潟大学 鈴木賢治

1. 分析と総括なしの中教審答申改訂

2016年3月に告示された学習指導要領に基づく新教育課程は、3年間の移行期間を経て今年度から完全実施されている。これまでの興味・関心・意欲・態度の観点別評価は、理解を軽視し、生徒の主体性や深い学びを奪ってきた。その反動が、新学習指導要領の「課題を解決する力」「主体的・対話的で深い学び」の表記に見え隠れする。

中教審答申、それに伴う学習指導要領の改訂作業は、10年間隔で繰り返される。そのなかには、子どもの実情を精査し、自らの答申や学習指導要領の効果を分析し、その総括は見られない。真摯な姿勢は全く読み取れない。もっぱら財界の見解や注文が中教審答申に書き込まれ、その責任は誰も取らない。この流れを断ち切ることが、学校再生の鍵である。

2. 細かすぎる現場への注文

技術分野では章立ての形式は変わらず、エネルギー変換と生物育成の順番が入れ替わり、2番目に生物育成がきた。週1コマの授業時数のままなのに、学習指導要領の分量が増え、細かな注文が増えたのが特徴である。例えば、「生物育成の技術」の「内容の取扱い」には「作物の栽培、動物の飼育及び水産物の栽培のいずれも扱うこと」など、授業の内容を増やす記述が顕著である。「内容」の「D 情報の技術」では、それがより顕著である。例えば、「情報の表現、記録、計算、通信の特性等の原理・法則と、情報のデジタル化や処理の自動化、システム化、情報セキュリティ等に関わる基礎的な技術の仕組み及び情報モラルの必要性について理解すること」「情報通信ネットワークの構成と、情報を利用するための基本的な仕組みを理解し、安全・適切なプログラムの制作、動作の確認及びデバッグ等ができること」などの記述が、増えている。これらを教えるためには、今のコマ数では実現できない。しかも、教員の配置もままならず、技術・家庭科には、免許外担任、臨時免許状、時間講師も多い。そのような実態にもかかわらず、授業時数も限られた中で、内容が増える一方である。

3. 学習指導要領の実施可能性がない

学習指導要領を無理なく実施するためには、授業時間数と教員の配置、教育環境の整備が不可欠である。しかし、それが用意されないまま、学習内容が次々と増え、これは構造的な問題である。その無理は、教員と生徒に転嫁されることになる。技術の授業が魅力なければ、技術の教員を目指す受験生も減り、教員の計画養成も困難となり、悪循環そのものである。



新教育課程(家庭分野)について

北海道教育大学旭川校 川邊淳子

今回の学習指導要領では、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等(主体的に学習に取り組む態度)」の3点として明確化しているのが特徴である。またこのことは、必然的に教科・分野の目標＝指導＝評価の一体化にも繋がってくるものである。

指導内容としても、児童生徒の発達を踏まえ、小・中学校の各内容の接続が見えるように、「A 家族・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」の3つの枠組みに整理された。これらの生活事象を、「生活の営みに係る見方・考え方」として「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」等の4つの視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫することを取り上げる。空間軸と時間軸の視点からの学習対象の明確化として、小学校から中学校へは、空間軸は、「自己と家庭」から「地域・社会」へ、時間軸は、「現在およびこれまでの生活」から「これからの生活・生涯を見通した生活」へと広がりを見せる。また、学習過程としては、問題解決的な学習をより一層重視することが求められている。その点においては、学習課題設定を、生徒自らのものとするために、時間をかけてでも丁寧に行っていくことが、学びを大きく左右する。

一方、教育内容の見直しの一例として、人とよりよく関わる力を育成するための学習活動の充実として、家庭の機能を理解し、家族や地域の人々と協働すること・幼児触れ合い体験・高齢者との交流等の充実が求められている。さらに、学習した知識・技能を実生活で活用するために、家庭や地域社会と連携を図った「生活の課題と実践」に関する内容の充実も図られている。また、小学校の教育内容との繋がりや関わりも忘れてはならず、例えば、小学校での異なる世代の高齢者との関わりでの学習は、中学校では、視力・聴力・筋力低下等の高齢者の身体の特徴を理解し、協働的視点から立ち上がりや歩行などの介助方法について理解させることに繋がる。また、小学校でのだしのとり方とその役割の学習は中学校では、だしと地域か季節の食材を用いた煮物が汁物として、だしの種類や料理に適しただしの取り方に繋がる。

家庭科を学んだ先にある目指す生徒像を明確にした上で、学習内容の精選と教育方法の検討は、今後より重要性を増してくる。コロナ禍で一人1台タブレットを持った授業風景はもはや日常的になりつつある。令和4年度からはGIGAスクール構想が本格的に始動するが、授業でのICT化のさらなる推進だけでなく、効果的な導入についても検証していかねばならない。

会員継続のお願い

★会員の皆様のごこれまでのご尽力に深く感謝いたします。長きにわたり本ネットワークを支えていただいた方々がご退職を期にご退会をお考えかと存じますが、コロナ禍で生活やものづくりの学びの場が危ういなか、生活やものづくりの学びの重要性は増すばかりです。引き続き会員として留まり、ネットワークの活動を支援していただくことで、会員たちがどんなに励まされることかわかりません。どうぞ、会員継続によるネットワークのご支援をよろしくお願いいたします。

新規会員のご紹介を

★生活やものづくりに基づいた学びの必要性の声を高めるために、皆様に会員を一人でも増やしていただきたく、お願いいたします。ネットワークを周りの方や研究会のメンバー、教員、学生、保護者、一般の方にご紹介し入会をお勧めくださるようお願いいたします。
入会届やリーフレット・パンフレット等はホームページからダウンロードできます。

世話人代表 堀内 かおる

事務局からのお知らせ

1. 学習交流会等への活動補助費を支給しております

これまで都道府県別の学習交流会等に活動補助費（1万円）を支給しておりました。コロナ禍ではありますが、学習交流会等の活動を支援し、本年度も同様に支給しております。事務局までお申し出ください。

2. メーリングリスト（ML）にメールアドレスを登録し、情報発信・交換等に活用ください

MLを活用して、迅速な情報配信や交流をはかりたいと考えております。多くの皆様の登録・活用をお願いいたします。MLにメールアドレスを登録すると自分で配信することができます。添付ファイルもつけられます。不慣れな場合は、事務局にお知らせいただければ事務局から配信いたします。

MLへのメールアドレス登録を希望する方は、事務局まで、メールアドレスをお知らせください。

MLアドレス：seikatsunetmail-ml.seikatsunet.com@ml.seikatsunet.com

3. 新版ビジュアルパンフレット（2019年4月版）を活用ください

新版ビジュアルパンフレットは、新学習指導要領への対応及び資料を更新するなど大幅な改定を行い、内容を充実させています。家庭科、技術・家庭科の学びの重要性を理解していただく資料として、すでに大学の授業や研究会、情宣活動等に活用いただいております。パンフレットがご入用な方は事務局までご連絡ください。

- ・パンフレット代：無償
- ・送料：会員拡大用に使用する際は無料

大学等の授業で31部以上は着払で有料（ただし30部までは無料）

なお、HPにパンフレットのデータが掲載されています。ご自由に印刷してお使いください。

4. ニュースレター送付先住所の変更について

勤務先の異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所でお願いします。

5. 退会届の提出について

退会される場合は「退会届」の提出をお願いしております。ホームページに「退会届」の書式が掲載されておりますので、ご記入の上、メール添付か事務局への郵送でご提出ください。なお、年度ごとの退会となりますので、年会費をお納めの上、退会をお願いします。

事務局メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp
ホームページ URL：<http://seikatsunet.g3.xrea.com/>

「春の学習交流会」のご案内

2022年3月27日(日)に「春の学習交流会」の開催を予定しています。奮ってご参加ください。

生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会 2022

GIGA スクール構想と ICT 教育：

家庭科と技術・家庭科における現状と課題

コロナ禍をきっかけに技術科と家庭科における ICT 教育のあり方が問われています。中学校の学校現場では、実際にどのように取り組んでいるのでしょうか。授業実践報告を受け、GIGA スクール構想が子どもたちの学びに与える課題や可能性について皆さんと討議し、考えていきたいと思えます。

日時

2022年3月27日(日曜日)

13:30~16:00

場所

Zoom によるオンライン開催

※参加費無料

講師

川崎市立川崎高等学校附属中学校 技術・家庭科 藤澤泰行 先生

新潟県三条市立第一中学校 技術科 後藤直 先生

申込方法

参加を希望される方は3月20日(日)までに事務局のWebサイトに掲載のフォーム <https://forms.gle/xM7oRXeDA5ZCcWsJ8> あるいは、右記のQRコードからお申し込み下さい。参加方法は、申し込まれた方に後日ご案内します。



●生活やものづくりの学びネットワーク事務局●
E-mail : seikatsu_nt@yahoo.co.jp
Web サイト <http://seikatsunet.g3.xrea.com>